ドルノド編

モンゴル通信

2014年05月11日

NO.8

いつも突然に…

突然の文化祭（民族衣装の６年生）

　モンゴルの学校には、年間予定や月間予定といったものはありません。一学期はだいたい９週やったら、たぶん一週間休み。二学期は８週か９週かやったら、たぶん二週間休み。秋に文化祭があるはず…というような大ざっぱな枠組みを人づてに聞くのみ。仕事や行事はいつも突然やってきます。

「首都で一週間研修会だって！」と、昼の11時に聞いて14時のバスに乗り込む先生たち。
「今週末ダンスの大会だって！」と、知らされ授業免除で朝から夜まで練習する子どもたち。
「明日から三日間、私たちの学校で県の先生たちを対象に研修会だって！」と聞いて、慌てふためく先生たち。
「一週間後に文化祭を行います。モンゴル舞踊・合唱・詩の朗読・社交ダンス・独唱。クラスごとで準備すること。」との張り紙を見て練習を始める子どもたち。

社交ダンスの９年生

　時には、突然決まった行事が度々延期になり、いつまで経っても“その日”が来ないということも。去る１月、「２月の保護者会で音楽クラブの発表をするように。」と聞き準備をしていました。しかし“その日”は、２月が３月になり、３月が４月になり、今週が来週になり、今日が明日になり、４時が７時になりました。モチベーションを保つのが大変でしたが、“その日”が来ただけ良かったのかもしれません。

　「明日、フブスグル（1,400km離れた県）の先生たちが授業を観に来るって！」と、放課後に聞き、夜遅くまで準備をしたけれど結局来なかった。ということもありました。はるばるやってくるはずだった人たちのために４時から朝ご飯を用意していた調理員さん。その横で、行き先を失ったスーティボダー（牛乳粥）とボールツォグ（あげ菓子）をほおばりながら談笑する先生たち。“昨日遅くまで準備したのに…”とモヤモヤしながらお腹を膨らませていたのは、日本人の私だけでした。

　なんで怒らないの？と聞いてみました。「モンゴルは移動が大変。道がない草原で、車がダメになったら、どうやったって移動できないじゃない。通りがかった車に助けてもらえたらラッキーだし、助けてもらえなくても仕方がない。携帯も通じないしね。明日絶対来ますなんて約束できないし、来れなくなったとしても、皆そういう事情がよく分かっているから構わないの。」

　分かるような、分からないような。まだまだ理解できない私は毎回、モンゴル人と暴れ馬に同乗し、右へ左へ前へ後ろへ草原を彷徨っている気分になって、クタクタになるのでした。

子どもたちとの音楽

　３月から小学校１～３年生の音楽の授業も担当することになりました。自分の腰程しか身長がない子どもたちに授業をするのは生まれて初めて。この二ヶ月、必死でした。初めて授業に入った時は、私のつたないモンゴル語に皆ポカーン。“これまで授業に入っていた６、７年生は、私の伝えたいことを読み取ってすごく良く理解してくれていたんだ！”と気がつきました。

　授業に入って大変なのは、男の子も女の子もすぐに手と足が出てあっという間にケンカになること。私が手を焼いてると「先生、どうぞ。」と別の子が自分の定規を差し出して来る。“何とか言葉で伝えたい”とまごまごしていると、クラスはとんでもないことに。すると、モンゴル人の先生が叱って手をあげる。子どもは大泣き。色んな意味で、とっても切ないです。

　もう一つは、子どもたちが授業中にお菓子を食べたりジュースを飲んだりすること。授業中の飲食は一応禁止されているものの、休み時間に近くのお店にお菓子を買いに行くことが許されているので、行くだけで休み時間を使い切ってしまった７歳の手が、お菓子に伸びないわけがありません。こちらの様子を伺いながら、ぱくっと口に入れる姿が余りにも分かりやすくて…笑いをこらえて話しかけます。

３年生の音楽の授業

　“なんだかなあ”と思うことはたくさんあるけれど、子どもたちは本当に可愛い。教室に入ったときの、「音楽！おお、やった！」と言う笑顔。「新しい歌、歌いたい！」と言う輝く瞳。キーボードを聴いて思わず立ち上がり、音に合わせて身体を動かす姿。以前は口パクで歌っていなかった子の元気な歌声。35本のリコーダーを多くのクラスで使い回しての授業でも、楽器に触れることが嬉しくてたまらないと言う。丁寧に扱い、使用後はキレイに拭いて返してくれます。

　やれることがあること、楽しんでくれる子どもたちがいること、助けてくれるモンゴル人同僚がいることに感謝の毎日です。（冨井愛）